

## 家事労働の変容可能性

松 田 智 子

家族研究をはじめて10年以上になる。最近の主な研究テーマは、近代家族における情緒性や家事労働である。特に家事労働に関しては、現在スウェーデンとの国際比較を通じて、家事労働の現状およびその変容可能性について、実証的な研究をすすめている。

家事労働は、近代家族を論じる上で重要なキーワードであるにもかかわらず、家族研究の分野では、これまで主要なテーマとして扱われてこなかった。家事労働の理論的研究に関しては、社会史やマルクス主義フェミニズムの貢献が大きい。社会史の研究によれば、家事を担当する専業主婦が歴史上登場するのは、産業革命以後のことである。18世紀後半の近代産業社会の本格的な登場とともに、人間の労働を職場と家庭という2領域に分け、前者を有償労働、後者を無償労働とし、後者を女性に配分するというやり方が成立した。アン・オークレーは、『主婦の誕生』のなかで、女性が、家事・育児という長時間労働を担わされていくプロセスを明らかにした上で、家事労働の特徴を、次のようにまとめている。(1)成人の男性には割り当てられず、もっぱら女性に割り振られる、(2)経済的な依存、つまり近代の結婚における女性の依存的役割と結びついている、(3)労働として認知されていない、(4)女性にとって、それが主たる役割である。

また、マルクス主義フェミニズムの研究は、男性と資本家の双方が、女性の家事労働から、物質的、経済的に多くの恩恵を受けていることを明らかにした。つまり「愛情にもとづく民主的な家族」という近代家族のイメージの背後には、女性が、愛情という名のもとに、資本家と男性の双方から二重に労働を搾取されている事実が隠蔽されているのである。

産業社会の産物として成立し、固定化されてきた性別役割分業は、現在さまざまな形でその問い直しが行われている。日本においても、女性の人権擁護や既婚女性の雇用労働者化の流れに伴い、家事労働をめぐる状況は少しずつ変化

しつつある。しかし、家事労働の大部分は依然として女性によって担われているのが現状であり、さらに、既婚女性の雇用労働者化がすすむなかで、「仕事も家事・育児も」という二重負担も生み出している。

家事労働というと、掃除、洗濯、炊事といった個々の作業を思い浮かべることが多い。しかし、家事を個々の作業によるビジブルな側面だけで定義するのは十分ではない。家事には計画、管理、配慮といったインビジブルな側面が多くある。たとえば、「家族の一週間の予定に気を配る」や「必要な日常品（トイレットペーパーなど）が不足していないか気を配る」は、人やモノに対する配慮や管理といったインビジブルな家事である。男性が比較的好く行うのは、「ゴミだし」や「風呂そうじ」といったビジブルな家事であり、ゴミを出す日を覚えていたり、さらには風呂が汚れていないかの点検をしたり、家族の生活全般に目を行き届かせ、気を配るのは女性であることが多い。家事の外部化が進行し、男性の家事参加が増加しているとはいえ、女性は依然として家庭内における管理や配慮をする労働者として、その責任のほとんどを担っているのである。

家事労働の実証的研究の目的は、家事労働をビジブルな側面とインビジブルな側面の両方からを把握し、マルクス主義フェミニズムの立場から、規範的要因と経済的要因の両側面からアプローチしていくことである。具体的な研究課題としては、まず規範的要因については、家事の愛情規範（たとえば、「私が家事をするのは、私の家族に対する愛情のあらわれである」、「私は、家族のために家事をすることに、喜び・生きがいを感じる」等）や身体化された規範（たとえば、「私は家事をすることが楽しい」、「私の方が家事がうまくできる」等）に焦点をあて、家庭内の役割分業と規範との関連を明らかにする。また経済的要因については、男性と女性が保有する経済的資源に焦点をあて、家庭内の役割分業と夫婦間の相対的な資源との関連を明らかにする。

家事労働の実証的研究を通して、夫婦間の役割分業が規範や経済的資源からどのような影響を受けるのかを明らかにし、夫婦間の役割の互換性がどの程度可能であるのか、今後の家事労働の変容可能性を探っていくことが目下の研究課題である。

（まつだともこ 佛敎大学社会学部応用社会学科専任講師）